

教会月報

No.522 (2022年6月26日)

【2022年7月号】

日本キリスト教団埼玉和光教会
〒351-0114 和光市本町 15-50

賛美の歌をうたおう

岩河 敏宏

詩編 100 編 2 節～5 節

- 2 ^{よろこ}喜び祝い、^{しゅ}主に仕え、^{よろこ}喜び歌って御前に^{すす}進み出よ。
- 3 知れ、^{しゅ}主こそ神であると。主はわたしたちを^{つく}造られた。
わたしたちは^{しゅ}主のもの、その民
主に^{やしな}養われる羊の群れ。
- 4 ^{かんじや}感謝の歌をうたって^{しゅ}主の門に進み
^{さんび}賛美の歌をうたって^{しゅ}主の庭に入れ。
^{かんじや}感謝をささげ、御名をたたえよ。
- 5 ^{しゅ}主は恵み深く、慈しみはとこしえに
主の^{しんじつ}眞実^{よよ}は代々に及ぶ。

小羊幼稚園の毎朝の礼拝や、教会が日曜日に行っている教会学校と主日礼拝で共通して“ある”ものは何でしょうか？それは、讚美歌をうたうことと主の祈りを祈ることです。そこで、今回は賛美について記すこととします。

賛美を辞書で引けば、“ほめたたえる”とあります。詳しく調べると、神の助けをを求めることを賛と言い、その祈りに対し神が同意し、神の助けを受けて事が成就することから、神をたたえることを賛といい、「助ける、同意する、たたえる」の意味となります。美は、成熟した羊のうつくしさに由来し、うつくしい

さらに「よい、ほめる」の意味も含まれます。これらを併せると、私たちの祈りの本質を聴いて神が応えて下さったことに感謝してほめたたえる、ということが“賛美”の意味となります。

これらを念頭に、冒頭に記した詩編に眼を戻すと、私たちの苦しみ・喜び・願い・感謝などを祈る場合、祈りの対象である「主を知ること」がこの詩編の中心にあります。「知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた」(3 節)とあるように、この私の本質を知っているのは、創造主なる神をおいて他には無い、と知ることなしには、祈りは空しいものとなります。

小羊幼稚園の園舎から「ことりたちは 小さくても おまもりなさる 神さま わたしたちは 小さくても おまもりなさる 神さま …」「ばらばらおちる 雨よ雨よ ばらばらばらと なぜおちる かわいたつちを やわらかにして きれいな花を さかすため …」という讚美歌が聞こえてきます。小さなものだからこそ目を留めて、護り・育まれる神さま。自然の営みにも神さまの御手が働いて、唯一無二の生命の芽吹きを支えています。小さなもの、はかないもの、だからこそ大切にされる神さまに、子どもたちが賛美の歌をうたっています。幼い魂に、神さまの本質が知らされています。私たちも、賛美の歌をうたおうではありませんか。